

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號 第四十五卷

昭和二十年十月一日發行

## 論叢

新刻天工開物及支那工業管闕……………法學博士 財部靜治  
 資金とその量定……………經濟學博士 小島昌太郎  
 貨幣本質に關する若干の問題……………文學博士 高田保馬

## 時論

原料統制と輸入統制……………經濟學博士 谷口吉彦

## 研究

ケインズの『一般理論』に關する諸問題……………經濟學士 柴田敬  
 チュルゴの租稅論……………經濟學士 島恭彦  
 再保險學說の發展……………經濟學士 佐波宣平

## 說苑

ナチスに於ける國民共同體の理論……………經濟學士 中川與之助  
 移住統計法……………經濟學士 青盛和雄  
 大都市近郊の農村……………經濟學士 田杉競

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（葉轉載）

## 説苑

### ナチスに於ける國民共同體

#### の理論

——ヘーンの論著によりて——

中川與之助

ヘーン博士 (Reinhard Höhn) はその著 "Das Wesen der Gemeinschaft" に於てナチスの共同體の理論づけを試みてゐる。彼は序言ともみるべき部分に於ていふ。國民共同體 (Volksgemeinschaft) といふことは今日の獨逸に於けるあらゆる政策の最高目標となつてゐるのであるが、その本質は未だ一般には明にされてゐない。今日の獨逸では個人主義から共同體への大轉換が行はれて居り、社會に於ける人間生活の形式や態度はこの新しき原理によりて根本的に改められねばならぬのである。これは一朝一夕に完成するものではなから

ナチスに於ける國民共同體の理論

うが、吾人にはこれが完成に向つて努力すべき重大なる使命が課せられてゐる。この使命を果すためには單に共同體を感ずるとか體驗するとかのみでは不充分であり共同體の本質や法則を理論的に認識して之を實踐に役立たしめばならぬ。さて新しき共同體の理論を構成するには個人主義的な科學、例之かのジンメル (Simmel) やウイーゼ (L. v. Wiesse) の如く社會關係を個人と個人との關係とみたる個人主義的社會學の如きは拒否せられねばならぬ。何となればそれは單に個人のみ觀察・研究して個人以上の共同體を認識してゐないからである。然れども從來の科學の功績を一切無視するわけではない。科學は各時代の科學であり、各々の時代の精神と任務とを以て生まれたものである。個人主義をすて、共同體の時代に入れる今日に於ては最早個人主義的學説は役立たず新しき共同體の學説が之に代りて擡頭すべきであるを主張するのである。翻つて科學としての共同體理論は今日まで全くなかつたわけではない。かの合理主義に反してあらはれたロマン

チック派にも顯著にみえ、ザヴィグニー(Savigny)は國民精神に基く法律を説き、ゲイルケ(O. v. Guericke)は共同體生活を基として「獨逸組合法」(Das Deutsche Genossenschaftsrecht)を著し、近くはテンニス(F. Tönnies)は共同社會と利益社會の區別を明にしクリック(Krick)やシュパン(O. Spann)も學理の基礎を共同體に置いてゐる。又かのイルザレム(H. W. Jerusalem)は始めて社會生活の總ての形式を共同體の觀念から引き出しベーム(M. H. Böhm)も亦國民主義の理論を高調してゐる。思ふに共同體理論のためになさるゝ仕事は山積してゐるのであり、これ亦一朝一夕に完成せらるゝものではないのであるが、今これが若干の原則に就て理論的考察を試みんとするものであるとなし、彼は以下に八項目に亙りて共同體に就ての重要問題を取り上げてゐるのである。

## 二

(5) 共同體とは何ぞや 共同體とは人間の外的な結合ではない。例之、享樂や遊戯や利害の爲めに偶々人

々が集合してもそれは共同體ではありえない。共同體といはるゝ以上人々を結ぶ共同體精神(Gemeinschaftsgeist)があり、人々がその精神の中に行動し生活するものでなければならぬ。しかば次にかゝる共同體精神は如何にして生まれるか、ヘーンはいふ。それにはその基礎として人々が何らか共同體的なものを共有せねばならぬ。共同體の構成に民族(Rasse)とか血統(Blood)が重要性を有するのはこれによる。さて共同體精神はかゝる共通の素質をもつた人々が無からか共同體の體驗を共にしたる場合に始めてあらはれて來るのである。即ちかゝる共同體の體驗にありては個々人は一つの共同的精神的紐帶で結ばれて最早切り離された孤立した個人といふものはない。唯共同體の肢體としての自己を體驗するのみである。共同體の體驗は個人の體驗の集計には非ずして共同體の肢體としての體驗であり、「私の體驗」(Ichleben)に非ずして、「吾々の體驗」(Wirleben)である。かやうな體驗やかやうな體驗から生まれる精神は唯體得すべきものにして理性を以て

説明しえられるものではない。個人主義者はこれを一の幻想といふかも知れぬが、戦場に於て兵士達が、又黨争に於て黨員達が企業經營體に於て勞働者達が常に體驗する所である。

(ろ)共同體の實質は如何 共同體の體驗の具體的内容はその共同體の如何によりて異なるが、目的や行動や苦樂を共にすることを常とする。例之戦場の將卒が祖國のために生死を共にし、黨員同志が政敵との鬭争に於て運命を一にし又家族員が家族のために喜憂を共にし宗教共同體が信仰の爲めに艱難を共にするが如き之である。即ち目的や行動を異にしては最早共同體ではない。人々は家族共同體の精神を體する限りに於て家族の成員であり宗教的共同體の精神を體する限りに於て宗教共同體の成員であり、政治的共同體の精神を體する限りに於て政治的共同體の成員である。人は屢々いかなる共同體精神はより重要であるかと尋ぬるが、かゝる問はそれ自體誤つてゐる。各々の共同體は各々人間生活に於て一定の任務を有するのであり従つて各

々の共同體にそれに相應する共同體精神の存するは當然であり。共同體精神の價值の高下を云々すべきでない。併しいかなる共同體が人間生活に對して最も廣汎なる要求をなすかと問はるゝならば、それは國家共同體であるといはねばならぬ。蓋し國家意志は人類の家族・宗教・政治・經濟・社會等あらゆる部面にあらはれて來るからである。而して今や獨逸は新しき國家觀の下に國民共同體を組織せんとしつゝある。之を完成するために國民生活のあらゆる領域に於て共同體精神の發現に努めねばならぬ。かゝる國民共同體の實現は容易ではなからうが不可能であるとは思はぬ。ゲルマン人の歴史を顧みると且つてかれらは家族の血族の民族の共同體生活を營んでゐたことを知る。當時にありて共同體精神はゲルマン人にとりては生活の基礎でありその共同體から追放されることは死滅を意味するの外なかつたのである。勿論吾々は舊き共同體の形成をそのままに再現しやうとするのではない。各時代にはそれに特有の共同體がありうるのであるから、現代に於て

は現代に相應しい國民共同體を創らねばならぬ。新しき國民共同體を作るには獨り政治の領域にのみ止まらず、あらゆる社會生活の部面に於て共同體の體驗をなす様に努力せねばならぬ。この體驗なくして共同體精神の發展は望めぬ。而して新國家の政策としてはかゝる社會的共同體精神の地盤として家族を重視する。人々は個人に非ずして家族の一員であるといふことから親族血族民族の一員であることの自覺を高めてゆかうとするのである。

(は)個人と共同體との關係 共同體の中には獨立的な個人はない。人は屢々共同體も亦個人の集合からなるといふ。勿論共同體には個人が存すがそれは獨自な個人に非ずして共同體精神の抱持者としての個人である。個人は彼れの人格を共同體の中に歸入せしめてしまつたので、最早個人人格として感ぜず共同體精神の中に行動し生活する。従つて個人的利害に相反することにも彼は甘んじて之に忍び之が犠牲となる。個人主義者はかゝる團體生活は個人の人格性を根こそぎにしそ

の結果は徒らに多くの平等的な大衆のみが残るに至るではないかと論難するがこれは誤謬である。凡そ人格には一種がある。個人主義的人格即ち「自我人格」(Jahreslichkeit)と共同體の中に終始する人格とが之である。個人主義的人格は可能なる限り總ての共同體的拘束から解放されんことを求むるものであり、共同體的人格は共同體の中に活き動くものである。個人主義的人格は舊き中世的生括様式との鬭争に於て偉大な功績を残し、就中技術(Technik)と物質文明(Materiell)の方面に大なる貢獻をなした。併しそれが個人的な自由を要求して民族の結合を弛緩せしむるに及んで民族の危機を將來するに至つた。茲に於てかこの民族的危機を救ふために共同體的精神や人格が必要となつて來たのである。而してこの共同體に於て個人的人格的活動の部面が抹殺されるが如く考ふるは皮相の見解であつて、この共同體精神を最もよく體し共同體の爲に力強く活きる人こそ時代の最も要求する所である。國民共同體を形成せんとするこの努力の中から、

從來の個人主義的人格とは全く異なる新しき型の人格が生まれるであらうし生まれさせねばならぬ。

(に)指導 (Führer) 者と共同體との關係　ヘーンはいふ。凡そ指導者性は二つの方法によりて成立する。

一つの場合はある共同體の中から最も多く共同體的性格を備へ且つ全體のたくめに最もよ指導をなしうる人物があらはれて自ら指導者となる場合がこれである。

例之、街頭に遊ぶ子供の仲間にあける指導者のあらはれ方の如きは之を例證する。他の場合は一の人格が存してゐて彼の抱く理念をめぐりて多くの人々が共同體を結合する場合が之でありクリストにあけるが加きはその代表的なものである。さてヒトラーは上述せる二重の指導者性を有してゐる。彼は戦場の兵士としても優秀なる指導者性を有してゐたし、又國民共同體の新しき理念をうち樹てゝその下に人類の共同體を作り上げた點に於てクリスト的でもあるとヘーンはいふ。更にヘーンは指導者に就て論ずる。指導者性の確立の問題は別として共同體のない所に指導者なく共同體のあ

る所には必ず大小の指導者がなければならぬ。而して苟くも指導者たるものは共同體の精神を最もよく體し全體の爲にその赴むべき所は正しく指導しなければならぬ。共同體が強ければ強い程彼も亦強かるべく共同體が発展すれば彼も亦發展してゆかねばならぬ。共同體の發展に指導者がついて行けない場合には共同體の發展は止まるか或は新しき指導者が之に代らねばならぬ。然れども指導者は妄りに交替すべきでない。何となれば指導者と被指導者との關係は特種の人格的關係でありかれが今日までに經來れる幾多の過程が彼に指導者性を與へてゐるのであり、それは一朝にして他の人によりて替らるるものではない。新しき指導者を任命しても任命せられたただけでは單なる上官であるにすぎぬ。かれが人民の共同體精神の中核となりうるならば始めて指導者となりうるであらうが、共同體とのこの生々とした人格的結合なく單に一定の法規の下に働くに止まるとすれば官吏であつて指導者ではありえない。思ふに指導者と官吏とは別物である。青年

が多く試験に合格してその能力を證明されても指導者能力はかゝる技術的知識から生まれて來ぬのである。それが可能であるならば専門家の多き獨逸に於て大小の指導者に事缺かぬのであるが事實は之に反する。吾人は日々の經驗に於て指導者と所謂専門的知識とは如何に關係の少きものであるかを知つてゐる。指導者には勿論知識を必要とするが、それは民族や國民に就ての知識であり共同體の生成發展に關する知識であり普通の意味に於て學習出來るものではない。それは眞に共同體の中に生活し共同體の何たるかを體得してゐる人にして始めて可能なのである。國民共同體を作るには指導者型の人物のみではなく更に純粹の官吏型の人物をも要する。國民や民族の問題に生々と結びついて國民に行くべき道を指示するものは指導者人格であり、それを助けその理會を普及させるために多くの官吏や専門家を要するのである。

(ほ) 國家と共同體との關係如何 之を明にするには國家の發展を一瞥する必要がある。ゲルマン國家に

ありては國家は共同體即ち家族の血族の共同體から成立しかゝる共同體の中に於て總ての社會生活が営まれた。従つてゲルマン國家にありては司法も警察も戰爭もその他今日の國家に屬するあらゆる機能は共同體そのもの、職務であり共同體の外にある人に委ねられなかつた。即ち國家と共同體とは一つにして別物ではなかつた。然るに後世に至り國家といへば財政權であるとか裁判權であるとかその他凡そ國家の本質と縁遠いものに就て考ふるに至つた。かくの如き共同體と國家との分離は絶対君主國家に於てその極に達した。即ち絶対君主國家にありては一方には君主あり他方に臣民があつて相對立し國家は完全に君主のための「裝置」(Apparat) となり昔日の共同體の面影はみるべくもない。この絶対主義は次に現はれし自由主義の下に變化していつたが市民階級の國家觀に至りては何等變化はない。即ち彼等は依然として國家を「裝置」とみ、それが市民階級に干渉することを最少限度に止めやうと努めた。蓋し彼等の理念によれば國家は市民のために奉

仕すべきものであり、市民は國家に對して權利や要求を主張すべく、國家は市民の幸福のための手段としてやむをえざる害悪であるとせら警れた。即ち絶對君主國家に代りてあらはれたものは所謂夜警國家 (Nachtwachtersstaat) であり、その全機能は市民の損害を防禦するにあつた。かゝる國家が一の「裝置」である點に於て變りはない。マルクシズムの國家觀も亦國家を「裝置」とみた。即ち國家を所有階級のための搾取の裝置にすぎずとみるのである。ナチス獨逸に至りて國家觀は一變した。今日尙國家と共同體とはゲルマンの昔に於ける様に一體のものでなく依然として「裝置」ではあるが、新しき共同體の理念からして他の目的に役立つべきものとせらるゝ。即ち國家は君侯の利益のためにも非ず、自由主義論者のみる如く個人のためにも非ず、實に國民を血族的・民族的結合による共同體に作り上げるための手段である。ヒトラーが「國家は目的への手段である。而してその目的とは肉體的・精神的に同種なる人々の共同體を維持し發展させることにある」

る」といつたが、これこそ今日のナチス國家の國家觀を道破せるものである。この國家に於ける共同體的原則は深く注意せらるべく、この原則より出發して今日の國家は共同體を構成し發展させるために國民の生活のあらゆる領域に干涉する權利が是認せらるゝ。例之、國家は國民共同體のために有害なりと考ふる場合には特定の個人の生殖能力をも斷たしめる。その他國家は失業救濟・冬季救濟はもとより農地の設定等に就ても力強い政策を實行しつゝあるのである。そしてヘーレンはいふ。國家狂信者も反對者もこれを以て國家全能の時代到來せりとなすもそれは外見上の觀察であつて實は國民の全能に外ならぬのであると。

(ハ) 教會と共同體との關係 自由主義的市民にとりては國家と同様に教會も亦一の「裝置」であると觀ぜられ、従つてそれが市民に及ぼす干涉の最も尠からんことを願はれた。自由主義の人達は教會を一生の重要な時期、例之、洗禮とか結婚とか埋葬等の場合に良心を安めるために、市民にとりてかくべからざる一の



施設として之を利用したにすぎぬ。施設としての教會はいはゞ市民にとりての一種の宗教的生命保險制度であり、宗教々理の穿鑿は神學者の手に委ねられて顧みられなかつた。教會を訪ねる人は自己の個人的相談の相手としてふさはしい様な牧師を探すにすぎず、教會は牧師の講議室であり坐席の人々は個々別々の個人にすぎなかつた。か様な有様はマルクシストをして教會は市民階級のものであり牧師は所有階級の代辨者に過ぎないといはしむるに至つたのである。新しき共同體を作らんとする今日の獨逸に於て教會も亦當然改められねばならぬ。國家が個人主義から共同體へ復らんとして努力しつゝあるこの際に、教會も亦キリスト教徒の宗教的共同體の樹立に向つて努力せねばならぬ。新國家が新しい同志を作りつゝある如く新教會も亦信仰と犠牲の新しい同志を作るべきである。生き／＼とした教會は生き／＼とした信者の共同體の上のみ存在しうる國民共同體を作らんとする。新國家にありては眞に國民たるもののみを官吏に採用する如く、教會も

亦かの宗教的官吏といつた様な型の牧師を斥けて共同體の爲めに役立つクリスト教的闘士を要求する。牧師は國民共同體から生まるゝ職務の自覺を有ち宗教を通して國民に共同體精神を呼び覺まし國民の胸にそれを燃え盛らしめねばならぬ。併しこの事は教會が新しき社會組織や形態を創造することを意味せぬ。新教會の使命國家の共同體精神を體して新しき宗教的感情を人心に導き入れるにあるのである。

(一) 國民共同體の新概念 總ての時代に亙りて固定した國民共同體の概念はありえない。既に述べし如くゲルマン國家では家族親族から始つて民族に及ぶ最も廣汎な共同體を有し共同體の肢體たる個人は經濟宗教否あらゆる人間生活の部面に於て同一的な思惟と感情とをもつてゐた。然るに個人主義的國家に於ては總ての共同體生活は破壊せらるゝ事となり民族は單に個々の個人が集計にすぎなかつた。個人主義的國家にありては共同體は問題ではなかつた。今日の國民共同體に於ては勿論かゝる個人主義的思惟は妥當しない。

併し茲に共同體といはるゝものはかの文化共同體

(Kulturgemeinschaft) とか言語共同體 (SprachGemein-

schaft) とは聊かその意味を異にする。國民といふ以上

勿論文化や言語や追憶や體驗やを共通にするであらう

が、かくの如く既に存在し成立してゐるものは今日我

々の論ずる共同體ではない。吾人のいふ國民共同體な

るものは將來成立せしむべき、國民をしてその方に導

くべき共同體を意味するのであり既に存立してゐるも

のならば今更之を云々する必要はないのである。然ら

ば新しき獨逸國民が實現せんと努力しつゝある國民共

同體は如何なるものかといふにその精神は今日まで國

民に對して示されたる高次低次の諸目的の中にあらは

れてゐる。高次目的の一つは民族的鍛鍊陶冶の思想で

ある。即ち民族的見地からみて優秀なる者が結婚し、

然も彼等の子孫を獨逸人の血統の外に更に獨逸の土地

によりて結ばんとするの理念である、新國家に於ける

農民制の設定或は血統や土地からの貴族を作らんとす

るはその現はれである。この高次の目的に對してそれ

を實現すべき低次の目的があらはれる。例之農場や移

住地の設定の如きこれである。高次目的として更に國

民に於ける身分や階級の對立の解消が掲げられてゐ

る。これに副ふ低次の目的としてはS・AやS・Sに於

けるさては勞働訓練所に於ける身分や階級の對立を解

消させることである。更に又高次目的の一つとして國

民各自の經濟的基礎を高め共同體の一肢體として民族

の中に安住せしめ生活の爲めに他に移出する必要をな

からしむることが掲げられてゐる。これを實現するた

めの低次の目的としては失業や冬季の救濟等があげら

れるであらう。勿論これらの高次低次の目的は將來益

々擴張せられてゆくことであらうが、國民共同體實現

への努力、共同體精神の發展といふ然に於ては變りは

ないのである。

(ち) 人は共同體を作れうるか 共同體成立せしむ

るために人は何をなすべきか、又かの共同體精神は成

立せしめらるゝものなりやと問ふ人に對しては次の如

くに答へうる。人は例へ共同體に就てあらゆる知識を

有するとしても知識のみを以てしては共同體は生まれるものではない。これらの知識は精々共同體を素すが如きものを防禦し除去するの助けとなるにすぎぬ。共同體精神は個々の人々が共同體の體驗に於て相互に結合せられた時に始めて生まるゝものである。されば共同體精神の成立の基礎には共同體の體驗が前提をなす。人々を政治的共同體に育て上げやうとすれば單にかれに政治的プログラムを示しても何の效もない。寧ろかれをしてその理念の實踐のために他人と體驗を共にせしむることを要する。共同體の體驗なくして共同體の精神は生まれぬ。即ち共同體は體驗によりて個々の人々が一つの精神に結ばれかとき、そしてかゝる共同體の體驗がその瞬間のみならず永く持續的に保持される場合に、換言すればその共同體の體驗が各人を精神的に改造した場合に、成立するのである。ヘーンは更に説明して曰く、ある大きな共同體の體驗は屢々かゝる共同體の精神を永く持續せしむることがあるが、かゝることは寧ろ稀れで人々は普通には共同的體

驗や精神を忘れて再び凡庸の人と化し殊に他の精神的潮流の影響をうける場合にはいつしか個人主義的になつてしまふ。あらゆる他の思潮と闘ひうる場合に始めて共同體の精神も張化されたものである。故に政策としては人々をしてかゝる抗抵をなさしむる様な條件を不斷に作り出すにある。これは共同體の體驗が常に何ら新なる方法によりて媒介される場合にのみ可能である。さりとて共同體の體驗を成立せしむる條件を作り出すに當りて常に同様な動機のみを利用することは効果的ではない。例之、祭や行進も常に繰り返しては人は無感覺となる。不斷に新しい形式を創り出す必要は茲にある。然も亦國民共同體の精神を覺醒せしむるには單に政治的領域のみに止まるべきでなく文化・經濟・社會等あらゆる領域に互りてその覺醒を促すべきである。新しき獨逸にありては今日の所未だ決して完全に國民が共同體の體驗や精神を體得する様に組織されてゐない。この點に於て高き價值ある多くの指導者を要するのである。指導者は人々の模範となり人々の信頼

の中心となり、人々の喜憂をよく察し、人々を救ひ人々を助けねばならぬ。かれらがかくして國內的な身分や階級の對立を解消せしめて國民を一の共同體に作り上げて行く様に指導すべきであるが、かゝる努力は民族や郷土に對する愛からのみ生まれうるものであり、この愛なくしてはいかなる目的も犠牲も徒らに「響く饒鉞」にすぎぬであらう。茲に於てか國民共同體のための仕事は結局は內的價値の問題に歸り宗教に深きその根據を見出さずには居られないのである。

### 結 言

以上私はヘーン博士の論說の綱要を述べた。勿論かれのいふ如く、新しき獨逸の國民共同體の理論は完成せられたものに非ずして、完成を目指しての努力の途中であり、かれの所論もいはゞその一つの試みにすぎないのである。さて彼の理論構成上の態度をみるに、彼の主觀的意見を述べずして、ナチス政策にあらはれたる客觀的事實に即して之、を理論化さうとするのである。この點に於て彼の態度は科學的であるが、ナチ

ナチスに於ける國民共同體の理論

ス政策に對して理論的批判が試みられてゐない點に於て非科學的であるともいへる。さて以上の理由によりてヘーンの説の批判は同時に又ナチス政策の批判に外ならぬこととなる。

(イ) ヘーンは一般ナチスと同様にゲルマンの共同體的國家にこそがれて、之を新しい形に於て再現せうとしてゐるが、ゲルマン國家に於ける社會的・經濟的基礎を何等究明してゐない。

(ロ) ナチスが目指す新共同體にありては、民族の訓練陶冶・階級對立の解消・國民經濟の安定を目的としてゐる。この點に於てナチスは民族共同體の本質的な課題をつかんでゐると思ふが、いかにして之を實現するか的手段方法に就てはヘーンは何も示してゐない。彼は共同體の成立には共同體精神が基礎とならねばならぬ。而して共同體精神は共同體的體驗によりて生まるゝが、今の獨逸に於ては國民がかゝる體驗をなす様な組織が生まれてゐないといふに止まる。

(ハ) ヘーンが共同體の精神が生まれるには、それ

を生み出す基礎がなければならぬとなし、かゝる基礎として彼はナチス政策の説く様に民族の血統をもつて来る。併しそこにも吾人は民族の思惟や政策はかれらの歴史や傳統を離れて行はれないことを知る。かれらは我等の民族の有する様な偉大なる共同體的精神を有せぬから、結局形而下的な血縁にでも訴ふるの外ないのであらうが、血統を同じうするが故に共同體精神が生まるゝ如く考ふるは、今日の如く高度に且つ複雑に發達したる人類の生物的存在と精神的存在との區別を餘りにも無視したものである。若しそれ彼等の考ふる如く精神の基礎に何らか物質的なものなかるべからずとなすならば、血統の同一といふが如き抽象的なものに非ずして、更に具體的に共同體的生活の基礎を與ふるに非ずんばその精神も亦確實たるをえないであらう。蓋しそれはかれらの社會認識から生まるゝ當然の政策である。

(二) ナチスは國家を目的をば達する手段「裝置」とみてゐる。國家は手段にして目的に非ず、國民ありて

の國家にして、國家ありての國民に非ずとなす思想は、民主主義的・個人主義的思想をぬけ切つたものでない。従つてかれらの全體主義・共同體主義は依然として西洋的なものでありわれら國民の信條と可なり縁遠いものである。

(ホ) ナチスは教會も亦新しき國家の共同體原理によりて再組織せらるべきものとなす。併し彼等の如く極端に宗教を政治に利用することは、國民に於ける信仰や思惟の自由を奪ひ精神的創造力を弱め、却つて政治的にもその反動を招くものでなからうか？、獨逸の宗教會は多くの動搖不安があるにも拘らずヘーンはそれらの問題を批判してゐない。

之を要するにヘーンはナチス政策の基礎として共同體理論を體系づけたものであり、吾人に示唆する所多きも批判論證を缺つべきものが少くない。特に吾人に感ぜらるゝことはかれらの共同體理論も亦かれらの歴史や傳統に制約されたものにすぎぬといふことである。